校長室だより

# 共学共高

第47号

令和５年６月６日発行

発行責任者
白梅学園高等学校長
武　内　　彰

## 教育実習生の研究授業 part1

５月 22 日から６月 10 日までの間、本校では 10 名の教育実習生を受け入れている。その研究授業の様子の一部を紹介したい。

まずは、１年５組における「現代の国語」の授業である。扱う教材は、山﨑正和氏の「水の東西」。日本の鹿(しし)おどしと西洋の噴水を対比させて、どういった事情・文化等の相違から在り様が生じているのかを探る授業である。形式段落に注目させて、日本と西洋との違いをホワイトボードに提示した空欄に入れることで明らかにしていく。その際に、ペアで考えさせ、一定の時間が経過したのちに、全体で答えさせる形式をとっている。生徒たちは声をそろえて自分たちで見つけ出した語句を言う。その声の多さに授業者と生徒たちとの良好な関係がみてとれる。

授業の冒頭にペアでの朗読を導入として行っている。生徒たちの声は全体で朗読するよりもよく出ているように感じる。朗読の意義を理解していれば、声が出ないということはないはずだ。

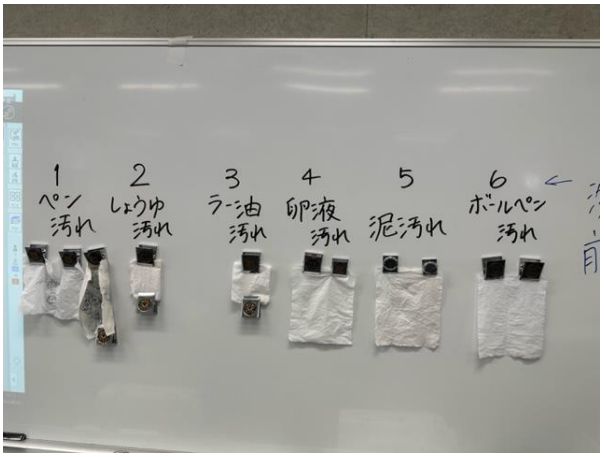
何度かのペアワークと全体での確認をとおして、鹿おどしと噴水の違いが明らかになっていく。キーワードとしては、「流れる水」と「噴き上げる水」、「時間的な水」と「空間的な水」、そして「見えない水」と「目に見える水」であろうか。日本人は、水の流れを感じることを重視しているのだという主張を読み取らせるのがねらいであろうか。教材の最後の一行には、次のような記述がある。『「鹿おどし」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだといえるかもしれない。』

最終的に読解させたいところへ、読み切り型の授業として完結できるとより良かった。

次に、1 年 7 組の「家庭基礎」の授業である。テーマは「衣服の手入れ」、衣服についた汚れの種類や洗剤の働きなどについて学習する。生徒たちは家庭科室において 6 つの班に分かれている。それぞれの班が担当する汚れが異なっている。例えば、1 班はブレザーについた油性ペン、2 班はセーターについた醤油を想定しているといった具合だ。各班で、汚れの種類、水の温度、洗剤の種類、洗い方などを話し合いやインタネット検索をとおして、決めていく。その後は、実際に布に汚れをつけて手で洗濯していく。タンパク質の汚れには、水温の高い水を使ってはいけない。タンパク質が熱変性してしまうからだ。また、ボールペン汚れには、あて布をしてたたくことが有効だ。そうした作業をとおしてほとんどの班が汚れを見事に落としていた。ただ、どうしても難しかったのが油性ペンの汚れである。たたき続けてあて布に汚れが移っているのは確認できるが、完全に落ちるところまではいかなかった。

各班の結果をホワイトボードに提示して、先生がまとめをしていく。こうして汚れの違いに応じた最適な洗濯を学習することができた。生徒たちも実際に実習して確認したことは忘れないであろう。

私事であるが、我が家では 20 年以上ワイシャツの洗濯は私が担当してきた。3 人の子どもたちが中高生の頃は、自分のものも含めて一週間に 20 枚は洗濯していた。ボールペン汚れや泥汚れなど、基本的な知識が入っていれば、もう少し効率的に汚れを落とせたかな、と思う。やはり、学びは大切だ。（つづく）



油性ペン汚れはなかなか落ちない

（共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）